

「地域型保育事業における 0歳児保育の現状と課題」

—アンケート及びインタビューを通して—

共同研究

《学校法人白梅学園》

松永 静子（白梅学園大学子ども学研究所）

村上 博文（白梅学園大学）

源 証香（白梅学園短期大学）

《一般社団法人日本こども育成協議会》

溝口 義朗（認証保育所ウッディキッズ）

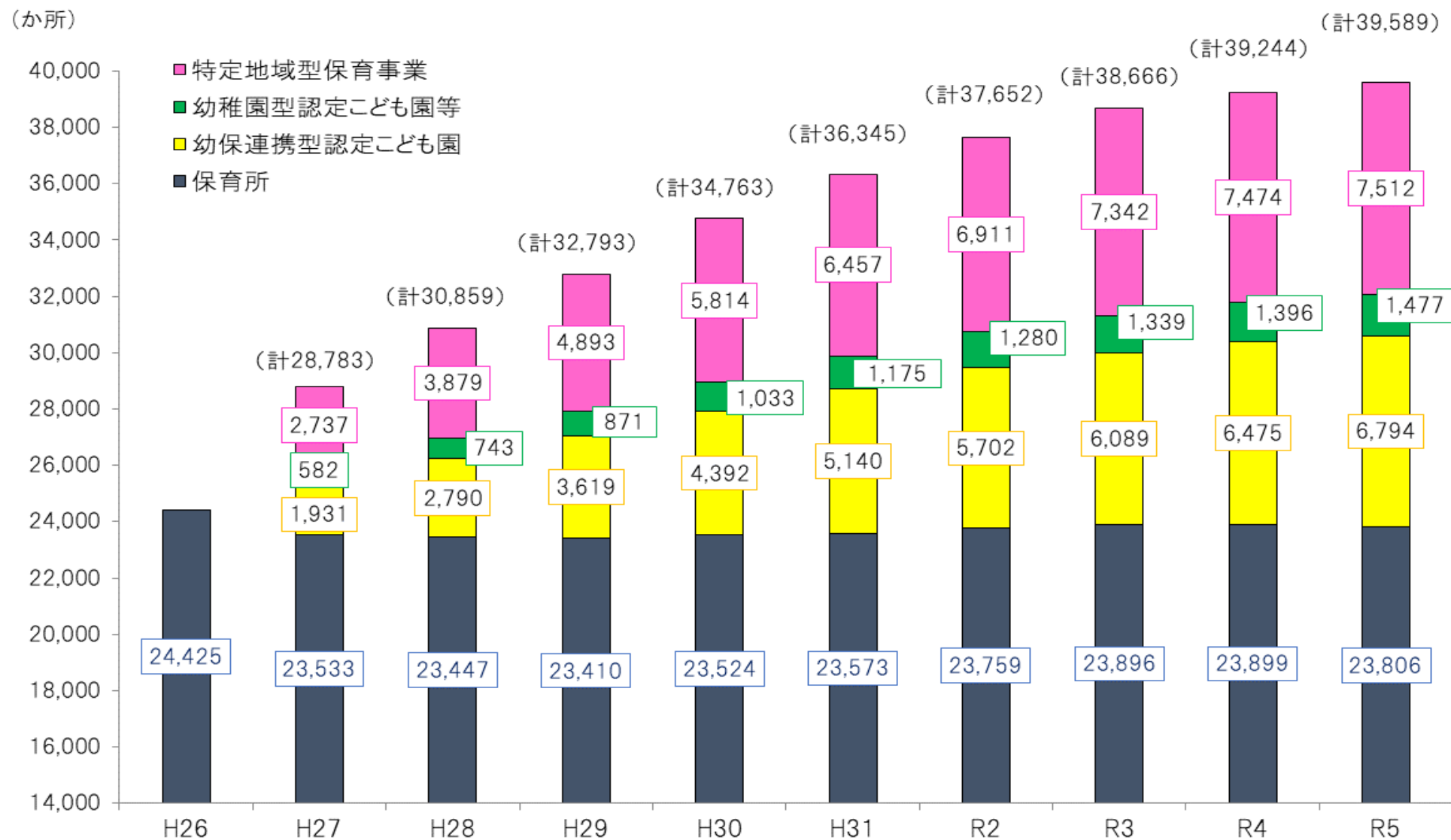
澤井 優嘉（株式会社ココロラボ）

研究背景と問題意識

2015年「子ども子育て支援制度」による地域型保育事業が施行されて以来、各地で保育所整備がすすみ、小規模型、企業主導型事業などが急速に増加し、少子化傾向も相まって、現在、3歳未満児の待機児童は2021年より減少傾向に転じている。

都市部において急増した小規模保育事業や東京都認証保育所においては主に3歳未満児の保育が行われているが、園庭を持たないなど施設の環境は様々であり、子どもの生活や遊びの実態は明らかにされているとは言えない。2018年保育所保育指針の改定では乳児保育における質の向上がこれまで以上に求められているが、保育環境や保育実践の実証的データは少なく、現状把握は困難な状況にある。以上から本研究では3歳未満児の中の0歳児保育に着目し、保育内容、環境条件、保育の実践における課題などを明らかにすることが必要と考えている。

「保育所等関連状況取りまとめ(令和5年4月1日) 令和5年9月1日こども家庭庁資料より



研究目的

- ▶ 本研究では、小規模保育事業及び認証保育所における0歳児保育に着目し、アンケートにより保育環境、保育内容、保育実践などについて、また施設長へのインタビューにより主に運営内容について、調査を行い、実態と課題を明らかにする。
- ▶ その結果をふまえて、地域型保育事業、認証保育所の今後の展開を図り、0歳児保育の課題を切り口に、乳児保育の質の向上について検討することを目的とする。

調査1 アンケート

時期：2022年10月～12月

対象：東京都内、関東近県の小規模保育事業、東京都認証保育所の施設長等86名
(全323園、回答率26.6%)

内容：園の概要、0歳児保育の保育室の環境、保育方法、形態、衛生面での配慮、生活や遊び、保護者対応、運営等

方法：QRコードの読み取りによるオンライン

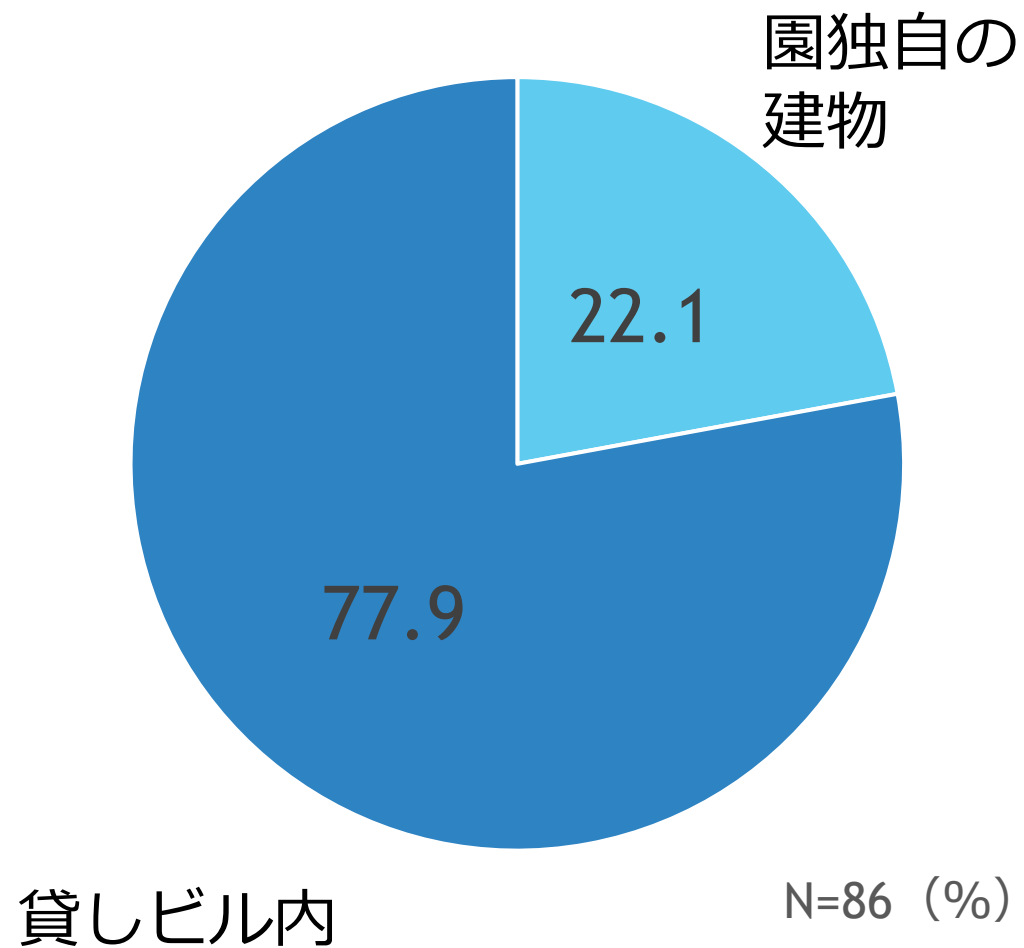
分析：単純集計後にグラフ化、聞き取り調査の実施園の選定（5園）

事業別回答率・職位別回答率

事業形態	回答率
認証保育所	33.7%
企業主導型	30.2%
小規模保育事業	24.4%
その他	11.6%

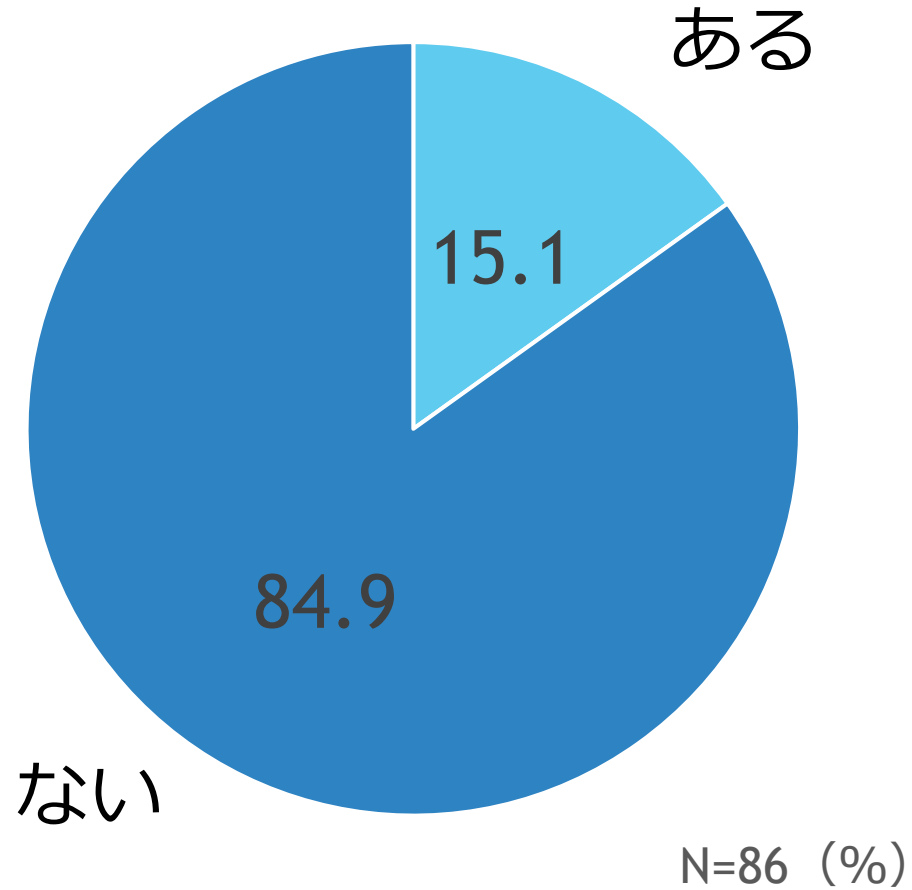
職位別	回答率
施設長	53.5%
担任保育士	31.4%
主任	5.8%
副施設長	1.2%
その他	1.2%

建物形態



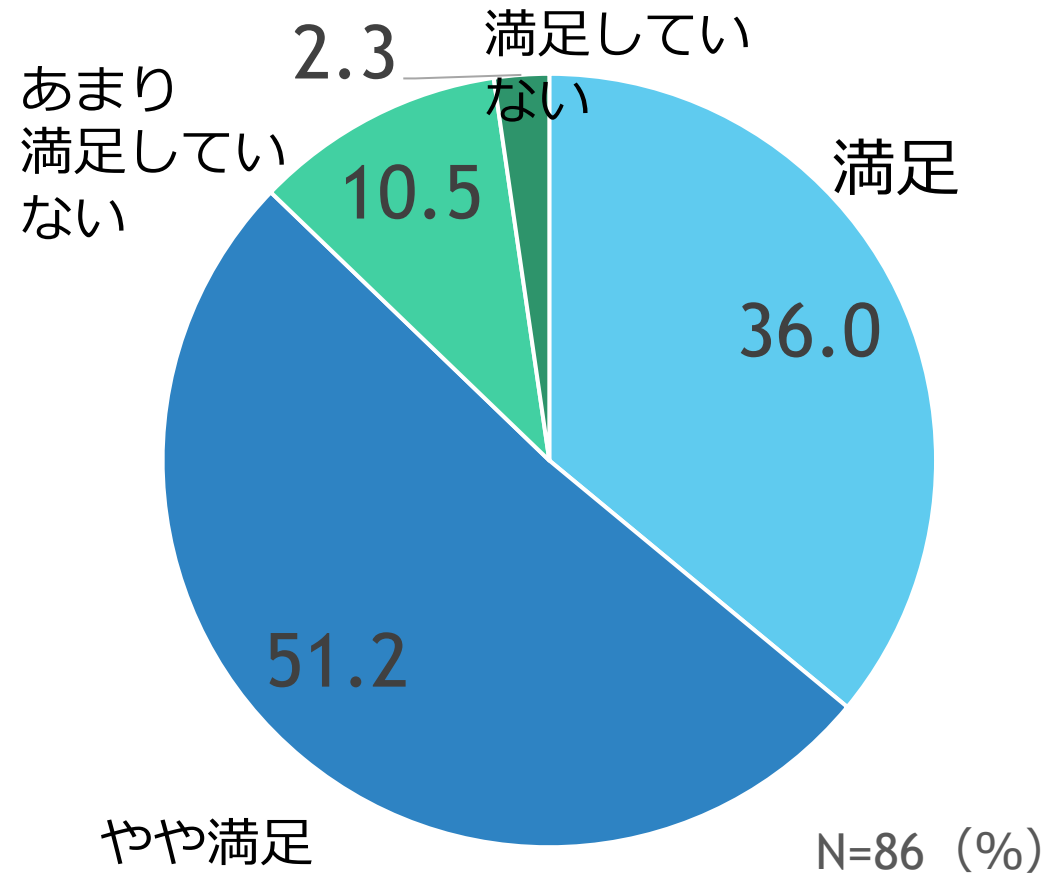
貸しビル内の園が
8割近く

園庭



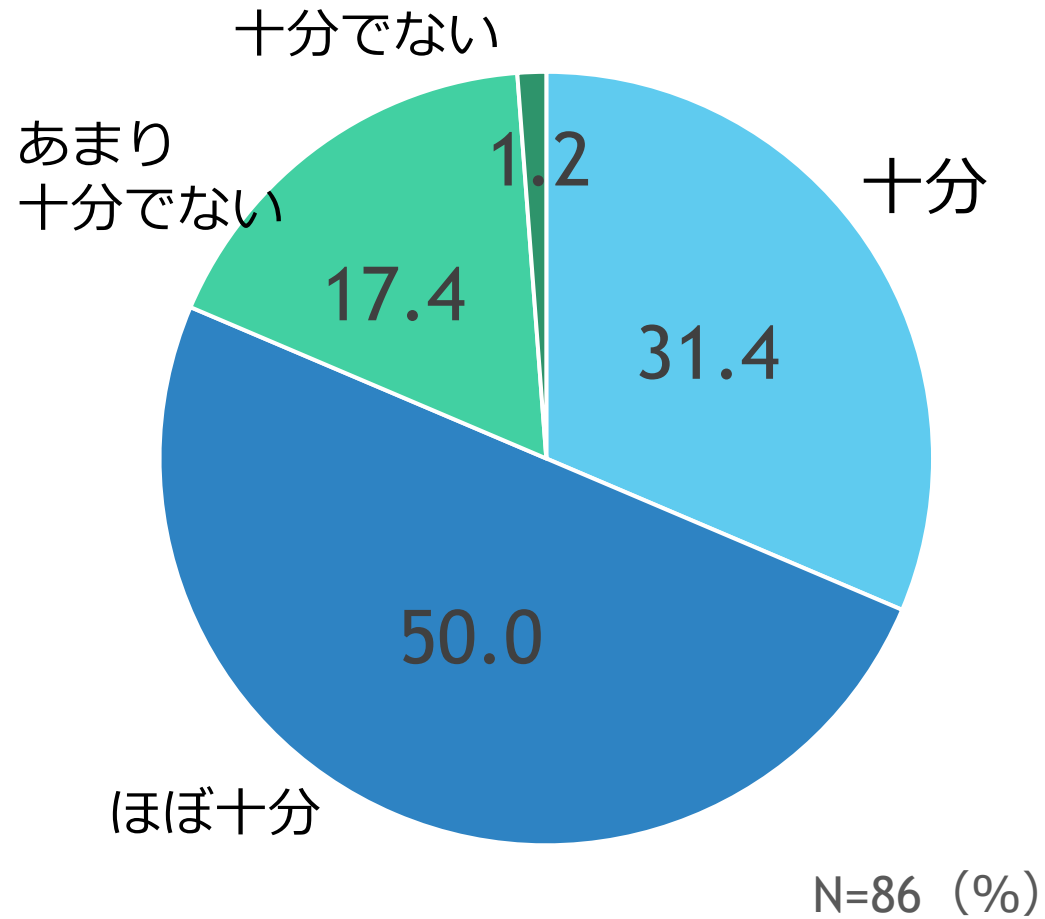
園庭がある園は
約7園に1園

保育室の雰囲気



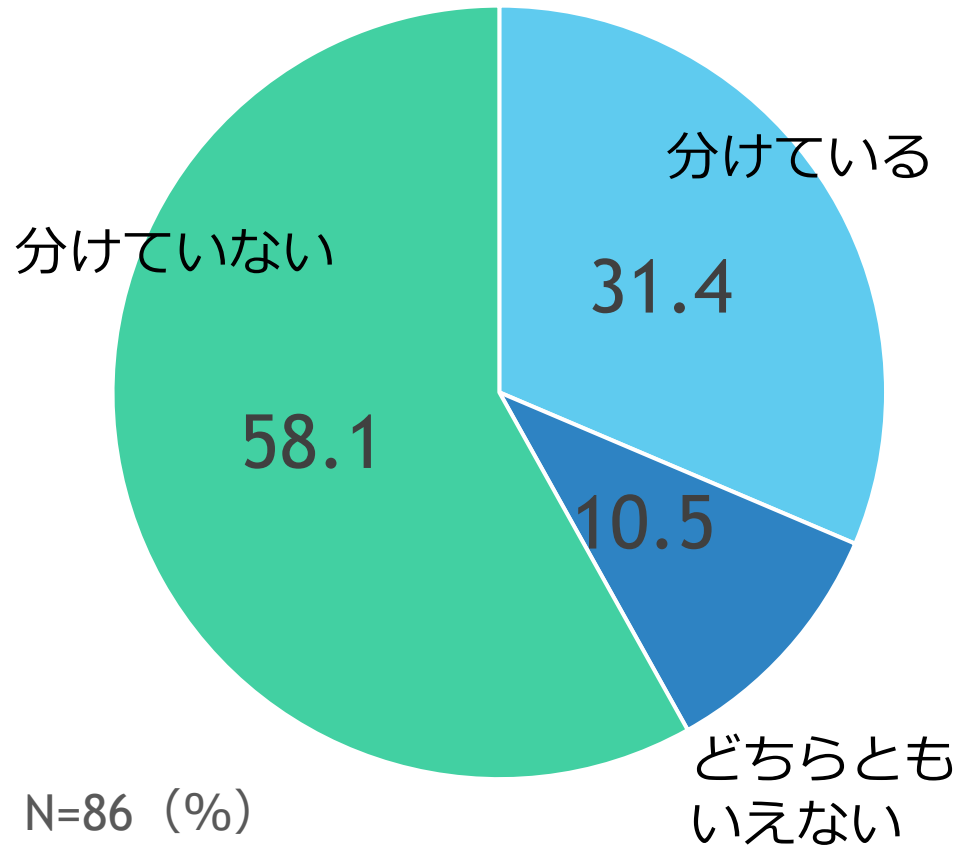
保育室の雰囲気は
90%近くが満足

保育室の広さ



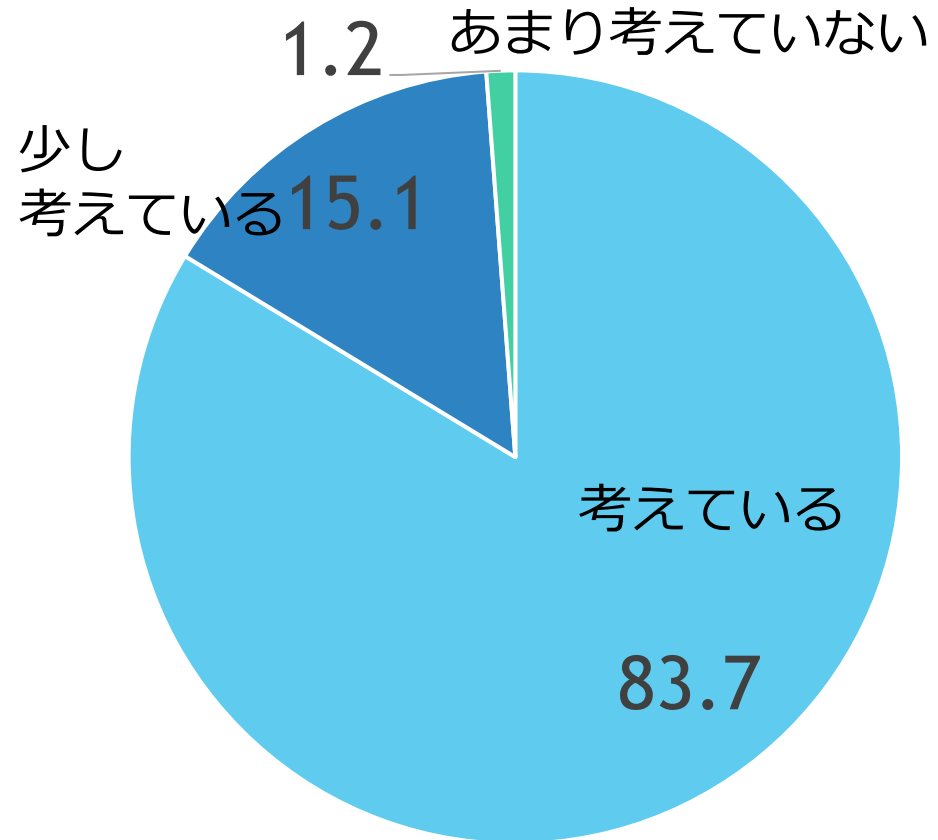
保育室の広さは
約80%が十分

空間構成—生活と遊びの空間を分ける



空間の広さは十分であるが多
かったのが
分けていないのが60%近く

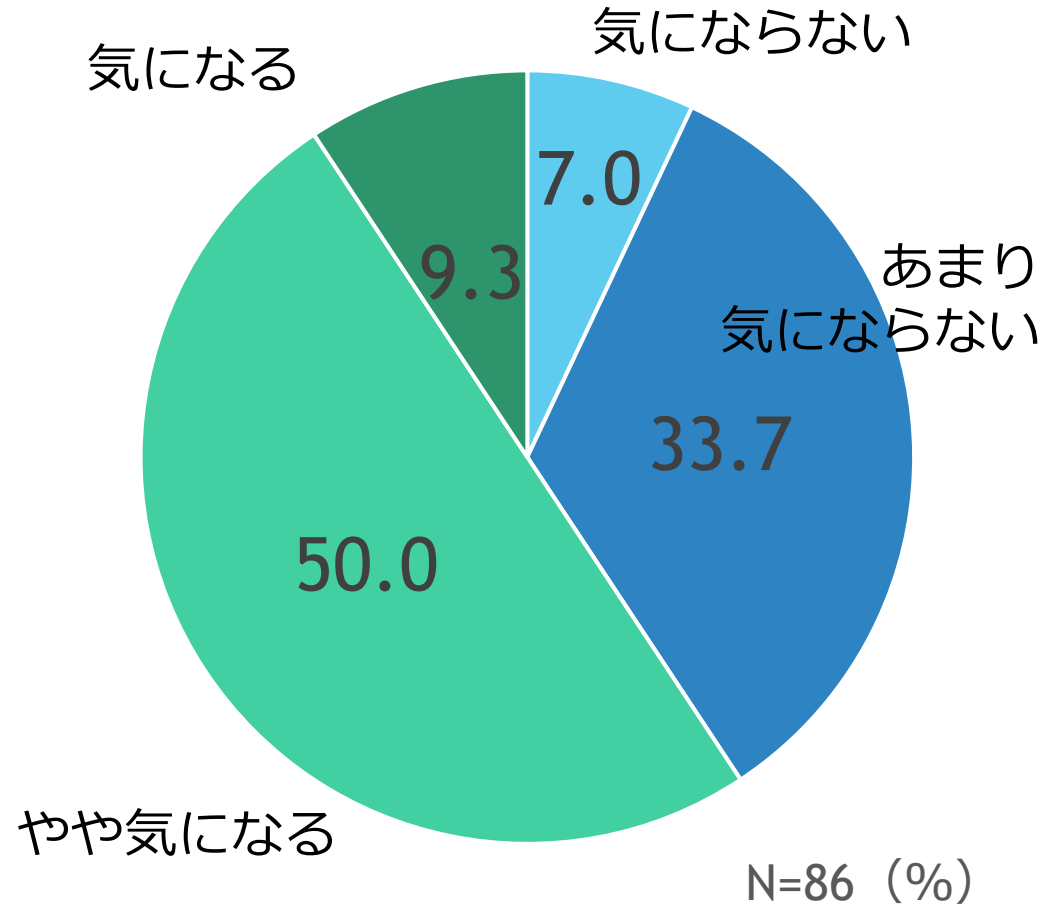
保育者の動線



N = 86 (%)

保育者の動線は
ほとんどの園で
考えている

室内の音環境



保育室の音環境が
気になるのは
60%近く

考察

地域型保育事業というと

- ▶ 「貸しビル内」(77.9%)で「園庭がない」(84.9%)という負のイメージ

実際には

- ▶ 保育室の「雰囲気」に満足(87.2%)し、「広さ」を十分(81.4%)に思う園が多い。
- ▶ その一方で、「空間構成」や「音環境」など、保育所等の共通の課題もみられる。

調査2 インタビュー

- ▶(1)対象：アンケート対象園の施設長5名
- ▶(2)期間：令和5年9月～10月
- ▶(3)方法：半構造化面接（約2時間）
- ▶(4)内容：質問項目（保育理念・保育方針・運営状況・保育形態・環境の工夫・小規模保育の良さ・小規模保育の課題・保護者対応・保育士不足への対策・小規模保育の今後について）
- ▶(5)分析：インタビュー結果の逐語録及び先行研究をもとに分析を行う。

調査対象園の概要

対象者：事業形態	創設年度	設置主体	所在地	園児定数（ ）内は0歳児数
A氏：小規模保育型	2015年	株式会社	東京都内	12（4）
B氏：認証保育所	2002年	株式会社	東京都下	48（8）
C氏：認証保育所	2011年	株式会社	東京都下	40（5）
D氏：企業主導型	2018年	株式会社	東京都下	30（3）
E氏：企業主導型	2017年	株式会社	神奈川県	28（7）

結果

- ▶ A氏（小規模保育型）0歳児4名（担任保育士2名）
- ▶ ビルの1階にあり、1フロアを仕切って使用している。0歳児は入口から遠い位置で静かな環境で過ごしている。朝夕合同で保育しているが、部屋が狭いので、遊びの設定が難しく、また泣き声や大声など物音が聞こえやすく、落ち着かないことがある。
- ▶ 園庭はないが散歩先の公園でシートを広げ、はいはいしたり日向ぼっこをしている。公園が他の園の利用で遊べない時は電車を見る散歩に切り替えている。
- ▶ 園全体で子どもをみることを大切にしている。一人目の子どもが多いので保護者の意向を踏まえ、子どもの育ちやケアについて専門的な意見を交えてアドバイスをして関係性を深めている。

結果

- ▶ B氏（東京都認証保育所）0歳児8名（担任保育士3名）
- ▶ 前身のモンテッソーリ教室から、保育園を設立し、現在3園となり、モンテッソーリ教育を取り入れて保育をしている。敷地も広く、保育所の隣には学童保育所とコミュニティーカフェが併設されている。
- ▶ 異業種（調理師）から保育の世界へ。当時は母親が施設長で、給食調理で働き、保育士資格とモンテッソーリの教師資格も取得、その後施設長となった。
- ▶ 「これからの時代の保育は違うんじゃないかなっていうのはすごく自分の中にはあったので、かなり大きな改革を始めましたね。」運動会、音楽会をなくした。保護者の理解も得られて、保護者同士の交流などに力を入れている。
- ▶ 離乳食は完了まで 栄養士が保護者と交換日記をしてアドバイスをしている。
- ▶ 学童保育事業 コミュニティーカフェなど子どもの育ちと地域を視野に入れた展開を目指している。

結果

- ▶ C氏（東京都認証保育所）0歳児5名（担任保育士2名）
- ▶ 経営母体は進学塾系の企業、その教育方針の一部を保育園の方針にも取り入れて運営している。外国人による英語教育も0歳児から取り入れている。
- ▶ 定員は40名としているが、現在は45名、そのうち0歳については、年度前半は3名 後半は徐々に増えて 最終11名まで、と弾力的な運営方法をとっている。
- ▶ 保育形態は朝夕合同であるが、日中は各年齢ごとのクラス保育をしている。
- ▶ 保育士不足があるが常勤の有資格のパート勤務社員で補っている。その場合は毎回同じ保育士ではないという課題がある。
- ▶ ワンルームで柵で仕切られているため、0歳児1歳児の泣き声で他児がつかれて泣き出して全体が落ち着かない。音環境が一番の課題になる。
- ▶ 保育士の年代が若いため、保護者対応で苦勞することもある。研修で学んでいけるようにしたいが、人で不足のために研修の時間も取れない。人材育成が大きな課題である。

結果

- ▶ D氏（企業主導型）0歳児3名（担任保育士1名）
- ▶ 保育方針として「0歳児とか1歳児とかクラスで分けてないのもそうですし、子どもと大人っていうのも分けてないですし、保護者と職員っていうところでも、もちろん役割はそれぞれありますけど、分けてないので、みんなで考えて、その子の成長だったりその子の環境だったり、保護者の環境だったり、職員とも相談してみんなで考えて、より良くなっていけばいいのかなっていうふうな考えでいます。」
- ▶ 「最初に入所する前に見学のときに、うちは、なんもやってないってことを伝えてます。ここに入ればこうなる、みたいなすごい期待をして入ると、お互いに不幸だと思うので、本当、なんもやってないって、こんな感じっていうのを2時間ぐらい見てもらったりとかして」外遊びが中心で、広い園庭や自然が多い地域に出て遊ぶことが多い。地域住民との交流もある。
- ▶ 30代の保育士が多いが経験が少ないため、園長がモデルとなって0歳児の保育を学んでもらっている。開園5年経過、退職者はなく、保育経験を積んでいる。
- ▶ 保護者の送迎時、ゆっくり話をする機会をできる限り作っている。ほとんどが二人目の子どもも入園し、保護者との関係は良好である。

結果

- ▶ E氏（企業主導型）0歳児7名（担任保育士2名）
- ▶ 認証保育所から認可保育所、小規模保育事業と経営を拡大して、現在は10園で企業主導型は1園。
- ▶ 大規模ショッピングモール開店前にテナントとして保育園の設置を求められ、365日開所の条件（日曜祭日も）で、認可との差別化でニーズがあると受諾。
- ▶ ショッピングモールの従業員の利用を見込んで、従業員のほとんどはパート勤務のため平日数日、土日は必ず、という子どもの登園パターンを想定している。しかし従業員の割合は少なく、一般の地域の保育ニーズに対応することになり、地域の土日勤務の介護士、看護師なども利用している。
- ▶ 地域の保育ニーズでは認可などへの希望が通らないケースが多く、認可が入所できると退園、年間3分の1が入れ替わる状況がある。年度はじめは極端に少ない、年度末は定員満杯でギリギリの保育状態になる。
- ▶ 赤字であるが、認可の方と経営上資金運用はできないため、そこが最も難しい。
- ▶ 保育所経営のスキル、環境や実践の工夫のノウハウはあるが、園児の他園への移動、正規職6名の労働時間、休日の確保で、生かされていなのが課題である。

考察とまとめ

- ▶ インタビュー調査結果の考察
- ▶ 園独自の方針を生かし、小規模ならではの柔軟な保育実践、異年齢の合同保育でアットホームな雰囲気での保育をしていることが共通点として挙げられる。
- ▶ 施設の規模により、環境条件の整備に限界があり、生活面、遊び面での工夫が難しいという課題もある。
- ▶ 正規保育士の確保が困難で、有資格であってもパート勤務保育士で補っており、研修の実施が難しく、また保育実践の経験を若手に伝えにくい現状がある。
- ▶ 制度により定員は弾力化して入所が可能になり、待機児は減少したが、現状は年齢に応じた環境や職員体制の問題について園内で解決策を見出すしかないため、保育士不足の折、相当な困難を抱えていることが明らかとなった。
- ▶ 藤澤らの先行研究では、小規模保育の質は中規模保育よりも高いことが検証されている。本調査結果で明らかとなった運営の諸条件の問題の解決を図ることで、小規模保育の質の維持、向上に貢献できると考察された。

今後の課題

- ▶ 本研究のアンケート（質問紙）調査結果の回答率が26.6%と低い結果であった。最低基準ギリギリの正規職員数、パート勤務者を補助に入れて休暇も含めシフトを回す体制が浮き彫りとなり、アンケートへなど業務外の行為の負担感から協力し難い結果となったと推察できる。本研究として実態把握の再調査は必須事項であり、今後の研究課題としてさらに検討していきたい。
- ▶ （近年養成校では小規模保育事業に就職を希望する学生も増加傾向にあり、研究の成果を養成教育に取り入れることも今後の課題として検討したい。）
- ▶ 本調査の結果から小規模保育事業、企業主導型の園児数の弾力化の積極的な導入が、待機児減少の一助になり得たと考えるが、園内での保育士の配置や環境（面積空間）の工夫では対応に苦慮している現状がある。この現状はさらなる現場の再調査で保育の質の低下を招く要因の一つになっていないか、検証する必要があると考える。

今後の課題

- ▶ 小規模保育事業の環境についてはワンルームタイプの比率が高い。その影響で音環境の問題が多く、さらなる実態調査が必要である。乳児には静かな落ち着いた環境での保育が求められ、早急に改善策を講じる必要がある。
- ▶ 地域型保育事業は3歳未満児の保育においてそれぞれの園が独自性を生かし、努力を続けている現状が明らかとなった。しかし現状は年度はじめには認可保育園に移動する、仮の保育場所としての受け止めが否めないため、努力の成果が地域で評価されず、継承していくことが難しい実態も本調査により認められた。この課題は3歳未満児の小規模保育を地域に定着させていく方向性で、政府のこども家庭庁、各地域の行政と事業者が連携して地域全体の保育の課題として検討されることが望まれる。